
『からたち日記由来』について

この舞台は、一軒の家に棲む3人の家族の生活の姿を描いています。3人は昔、チンドン屋で生計を立てていました。しかし今は母親が発狂し、長男と伯父は母親の世話をする毎日。その母親は昔、チンドン屋として活躍していた頃の演奏と、その音楽に合わせて観客に聞かせていた講談、「からたち日記由来」を忘れることができません。毎日一度は、狂ったように「からたち日記」という流行歌を歌い、その作品の由来を語りつづけるのです。

彼女が歌う「からたち日記」とは、次のような恋愛の歌詞になっています。「心で好きとさけんでも、口では言えず、ただあの人と、小さなかさをかたむけた、あの日は雨、雨の小径に白いほのかな、からたち、からたち、からたちの花」「からたちの実が、みのっても、別れた人は、もう帰らない、乙女の胸の奥ふかく、すぎゆく風、風の小径に、いまは遥かな、からたち、からたち、からたちの花」

この歌詞のもとに作曲された流行歌「からたち日記」は昭和の時代、第二次大戦終了後に日本の大衆に愛され唄われたのですが、この歌詞自体は昭和のものではなく、大戦前の大正時代に書かれていた、それがこの講談の作者の主張するところです。しかもそれは、実在の一人の女性によって、書かれていたというのです。

この講談によれば、この歌詞の作者は、日本の天皇に政治上のアドヴァイスをする貴族を中心とした合議機関（枢密院）の副議長、芳川顕正伯爵の娘、芳川鎌子だということです。

鎌子は、貴族の学校とされていた学習院を卒業、結婚して一人の子供を生んだ。しかし夫との家庭生活に不満を感じた彼女は、芳川家の専属の運転手と恋愛関係になってしまう。そして二人は列車に飛び込み死のうとするのだが、芳川鎌子だけは生き残ってしまう。それが日本社会を揺るがす政治上の大事件になってしまったのです。

芳川鎌子の行為は、天皇陛下を中心にして結束する日本民族を侮辱するものである、すぐに鎌子を死刑にすべきである、これを放置しておけば、日本にもロシアと同じように革命の嵐が到来し、天皇制が打倒されることになるかもしれない、と国会でまで議論されることになりました。

そのために芳川鎌子は、芳川家を除籍され尼になり、信州の山奥の寺でその人生を終えるのです。彼女の死後、彼女の日記帳が発見され、その中にこの流行歌「からたち日記」の歌詞が書かれていた、というように芳川鎌子の人生が講談として独自に創作されています。

この戯曲の作者は鹿沢信夫、鈴木忠志や別役実と同じ学生劇団に所属していた学生運動家、大学卒業後は貧しい人たちのための社会活動に従事していたが肺結核を患う。そのために故郷の秋田県に戻り、病院で長らく療養していましたが、36歳で亡くなっています。
